### この部では、派遣、養成・現任研修、関連事業に関する記述回答について、回答結果をカテゴリー別に整理して掲載する。

## 第１章　盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業

## １．派遣事業運営で困っていること

## （１）通訳・介助員の人数不足

・活動できる人、曜日が決まっていて、盲ろう者がそれに合わせて依頼するような場合もある。自由に依頼できるように登録者を増やしたいと思うが、なかなか難しい。

・派遣できる通訳・介助員が少ない。(通訳・介助員が育たない)

・実践できる通訳・介助員が少ない。

・平日時間が確保できる通訳・介助員が少なく、センター職員による派遣対応が増えている。

・盲ろう者も通訳・介助者も高齢化。どちらも若い人が入ってこない。今後ベテランの通訳・介助員がぬけたあと、補充がおいつかないのではないかと不安。

・実働可能な通訳・介助員の不足。

・通訳・介助者が見つからず、派遣を断ったケースもある。

・指点字学習会を開催しているが、通訳・介助員を確保できず、やむを得ず中止となることがある。

・盲ろう者の近くに登録通訳・介助者が少なく、交通の不便な場所に関しては、時間も限られてくる。(日中のバスがない等)

・盲ろう者からの希望(指名)が偏り、派遣調整ができない。

・活動可能な通訳・介助者の不足。

・男性の通訳・介助員が少ない。

・夜間の派遣に応じる通訳・介助員が少ない。

・久留米市在住の通訳・介助員がいない事

・通訳ガイドヘルパーの病気などにより休業状態の登録者が増え、これまで近隣メンバーのローテーションで対応できていた派遣依頼が対応できないことがある。仕方なく遠方の通訳ガイドヘルパーに依頼するが、朝早いガイド対応は長期的に考えると無理があるように感じる。

・登録通訳者の年齢が高く、また手話通訳と重なっているため、調整が困難な時がある。

・通訳・介助員の高齢化。

・手話通訳者の資格を持つほとんどの通訳・介助員が登録解除してしまい、派遣ができなくなる状況に追い込まれている。［稼働時間の違い（手話通訳者は自宅を出て戻るまでがカウントされる）と、謝金単価が同額なのが原因？］

・平日に活動できる通訳・介助員が少ないこと。

・平日活動できる通訳・介助員が少ない。

・若い通訳・介助員もいるが、平日はみんな仕事で活動できない。

・通訳・介助員の登録者数は多いが、日中活動できる人が少ない。

・平日に活動できる通訳・介助員が不足している。

## （２）通訳技術

・病院などの専門的な内容を通訳できる人材の不足。

・通訳ガイドヘルパー登録者の中で、通訳とガイド両方ができる人材が不足しており、通訳専門、ガイド専門に分かれている。

・登録通訳・介助員の資質向上のための研修の場が得にくい。

・養成講座受講後、登録された通訳・介助員の方で、技術習得が不十分と話される方が多い。そのため、友の会の交流会への参加を勧めているが、参加者が増えず、継続して参加される方も少ない。

・通訳・介助員のレベルアップが現任研修会のみでは難しい。

・高度な通訳に対応できるスキルを持つ人材の不足。

・盲ろう通訳・介助員の仕事に対するモラルの欠如を起因とするトラブルの発生。

・通訳・介助員の技術。

・盲ろう者に対応できる通訳技術をもった登録通訳・介助員が少ない。

## （３）通訳・介助員の固定化

・登録者を均等に派遣したいが、コミュニケーション方法の技術があるかどうかにより、派遣者が限られてしまう。

・平日に活動できる通訳・介助員が少なく、医療に関しては有資格者となるとさらに数人の中でコーディネートしていくと派遣がなかなか難しい状態です。

・盲ろう者で特定の方しか指名してこない方がいてそういうコーディネートも困っています。

・申請者の派遣時間が偏り、一部の通訳・介助者には週に何度も通訳・介助依頼を行っている。また、派遣する通訳・介助者も固定化している。

・ろうベースの盲ろう者の登録割合が多く、視覚に障害のある通訳ガイドヘルパーの活躍の場が少ない。

・重複障がいのある盲ろう者（軽度知的・発達障害）への派遣対応。本人が慣れている通訳・介助員や知識のある通訳・介助員でなければ対応が難しく、その分通訳・介助員の負担が大きくなってしまう。

・派遣登録(通訳・介助員)はされているが、活動されていない方が多い。(通訳・介助員が固定化してしまう)

## （４）予算・費用

・予算が厳しい。

・県の派遣事業費の事務費が少ないこと。

・県、市ともコーディネーター費が予算にないこと。

・県、市とも派遣事業費のみで助成金がついてないため人件費、事務所費がない。(運営費は一般の方からの寄付、通訳・介助者からの寄付でまかなっている)

・友の会の行事（盲ろう者、通訳・介助者が共に参加される場合）とセンター派遣制度の利用の線引きが難しい。（全国盲ろう者大会の分科会準備中の通訳、友の会定期総会・交流会時の交通費等）

・予算の確保。派遣対象外の活動（友の会会議や役員としての活動）についての予算を確保するのが難しい。

## （５）派遣時間数の上限

・派遣時間数が県と市で差がある。

## （６）運営体制

・通訳・介助員の連絡調整、利用登録者と登録通訳・介助員からの相談への対応、活動報告書の処理、通訳・介助員への謝金の支払い等、全てのことを1人で担当している。人件費もあまりに少ない。複数で分担できるような体制と人件費が必要。

・他の事業も含めて事務量に対する人員体制が少ない。

・県と市の意見が違うので事業の運営が大変。

・派遣事業コーディネーターの人員不足と人件費不足。

・派遣利用が増えているが、その分事務も増えるので対応が遅れがち。

・盲ろう者が高齢になっているので、介護福祉関係の制度やケアマネ等どのような体制づくり、相談をしていけばいいのか困っている。

・事務職員がパート並で身分保証もなく、次期世代への引継ぎが困難である。(人材確保等)

・事業の運営にあたり、事業費から家賃の支出が認められず、友の会の予算から支出しており、派遣に必要な十分な広さを確保できないばかりか、事務局員が常駐できるスペースがない状況。県へは要望をしているが、認めてもらうにはまだまだ時間が必要。

・現在格安で派遣事務所を借りているが、ここは今年度いっぱいで出なくてはならないので、深刻な問題になっている。

・研修を計画し、実行するための人員と予算が必要。

・常勤ではなく、月10日の勤務で(2人で20日間：時給808円)派遣、謝金支払、養成講習など全て行っているため、心身ともに負担を感じている。

・今年度より市の謝金単価が上がり、当県は現状維持のため、今後の支援に格差が出てくることを危惧している。

・事務所が無く携帯での対応なので、時間（朝・夜）、日曜日問わず依頼メールが入ること。（緊急性がないのに）

・盲ろう者個人と通訳・介助者との間で派遣を決めている事が度々あり（直接依頼）、報告書が届いて依頼の内容を知るため、確認作業に時間をとられる。

## （７）通訳・介助員の業務範囲

・盲ろう者とその家族の自宅へ介助に伺う際、盲ろう者ではなく、家族から通訳・介助員に頼み事をされることがあり、通訳・介助員が対応に困っている。（物を探してもらう、代読をお願いする、盲ろう者と一緒に車に乗せてもらう等）

・派遣に関して通訳・介助員のモラルになるが、詳細まで確認しなかったり、当日に苦情を言ってきたり、依頼のない買い物など自己判断で行い、報告がなかったりする事が多くなってきている。まず、自分のコーディネート力だったり、素質が問われるので努力しなくてはいけない問題もあるが、全てにおいて自信がない。

## （８）盲ろう者側の派遣事業利用方法

・登録盲ろう者の半数近くが派遣を利用していない。

・盲ろう者の個性が強く、相性が悪い人はつけないでほしいと言われる。依頼できる人が少なくなってしまう。

・ろう者の通訳・介助員をつけないでほしいという盲ろう者がいる。ろうの通訳・介助員は、登録をしても依頼ができず登録をやめてしまう。

## （９）登録盲ろう者の高齢化

・現在の登録者の高齢化

・盲ろう者の高齢化や認知症により入院や施設に入所した時の対応。特に1人暮らしの盲ろう者にどこまで関わって良いのか。

・盲ろう者の高齢化に伴い、自家用車の利用を希望する人が多くなっている。対応できる通訳・介助員は限られてくる。

## （１０）プライバシー

・守秘義務が守られない。

## （１１）距離

・遠方の盲ろう者は、車での介助が必須となっている。事故等の懸念があり、交通機関の利用を薦めたいが、まず盲ろう者の自宅から駅までの介助が必要であるため難しい。（バス停が近くにない、本数が少ない、駅まで遠い、という現状）

・できるだけ交通費のかからない範囲でコーディネートが望ましい。しかし手話通訳者と兼ねている方が多く、やむなく遠方の方に依頼する事がある。拘束時間も長くなり、通訳・介助者の負担にも繋がる。

## （１２）その他

・家族が登録しているのでなるべく派遣しないように調整しているが、できれば要綱に家族介助は認めないというような文言を入れたいと思っている。

・他の障害を併せ持つ盲ろう者への対応。

・盲ろう者も通訳・介助員も「自立」のための事業である認識が弱い方がいる。

・車椅子介助の盲ろう者、歩行困難な盲ろう者の移動に関すること。

・平成30年度より自治体に対して、コーディネーターをする人がいないため、委託先を他団体にお願いするよう要望している。

# **第２章　盲ろう者向け通訳・介助員養成研修事業**

## １．養成研修事業全般で困っていること、感じていること

## （１）受講修了後

・受講後の登録になかなかつながらない。

・養成講座を最後まで修了しても登録に結びつかない。

・養成講座受講修了者には繰り返し受講してほしいと思い呼びかけるが、一度受講すると以後の開催には参加しない人も多い。また、現任者についても講座内容を選択しての受講によって通訳・介助技術の向上にもつながるので呼びかけに力を入れたい。

・講習会を修了し、派遣登録をしていただけたが、その後活動するまでに至らない方がいる。

・毎年の事だが、登録者は増えても新しく登録した方を活動につなげられない。勉強会や交流会に誘っても反応が…。受講中はみなさん熱心だったが、一人、二人が残る感じ。

## （２）受講者募集

・受講人数が募集の人数ほど集まらない。

・盲ろう者とのコミュニケーション経験のない方も含め、受講を呼びかけたい。

・応募者の年齢が高い傾向にある。若い層の通訳介助員を養成したいが、できずに困っている。

・「盲ろう」という障害の認知が低いので受講生を集めるのが大変。

・2年前より広く呼びかけたにも関わらず7名の申し込み。面接の結果、5名の受講となった。募集方法に工夫が必要。

・募集をしても申し込み人数が少ない。

・まず受講生募集で最低条件を付けたほうがよいのか。ろうベースの盲ろう者が多数で盲ベース1名のため、手話ができず、登録しても活動につながらない現状がある。間口を狭くする事で人数が減ってしまう心配もある。

・受講生の高齢化もあり、コミュニケーション方法を獲得していない人が大半の状況。盲ろう者のことを知ってもらうだけでも良いとの思いで年齢の上限を決めていないが、未来が見えないので迷っている。

## （３）運営体制

・職員の確保。

・3年経つが県よりそのままでといわれた。このままでよいのか。しかし、時間が増えてもスタッフを確保できるかわからず悩む。できればたくさんの外部講師を頼みたいが、予算も限られ手さぐりで現在行っていることに不安を感じている。

・盲ろう講師に対し、補助講師と通訳・介助者を組み合わせているが、通訳・介助者の人数が足りない。

・スタッフの選択、講師依頼、カリキュラム構成、募集のビラ配布に至るまで全て1人でやるのでなかなか改善できず、毎年途中でアンケートをとったりして問題点から取り組んでいる。スタッフとしての自覚、送迎ありの協力者のかかわり方もいつも問題になる。

## （４）予算・費用

・地震の関係で予算が大幅に減った。

・養成事業担当者の人件費がない。人件費の予算がないため、派遣事業のコーディネーターが養成事業の事務も兼任してボランティアで行っている。養成事業の運営を適切に進めるためには、人件費を予算化し、人員を確保する必要がある。

・事業費が足りないので講師の数や手当てなど、充分に支払えない状況にある。スタッフなども厚意に頼ってしまっている。

・予算の関係上、標準カリキュラムの時間数に達していない。

・時間を増やしたいが予算の関係でギリギリのカリキュラムになっている。(コミュニケーション実技)

・事業費不足。

・予算の確保が難しく、実習や情報保障の一部を担当職員が担い、経費の軽減を図った。

・養成講座の時間数を増やしたいが予算要求が通らず、予算が上がらない。

## （５）広報

・盲ろう者通訳・介助員養成研修会を募集しても受講者が集まらない。

## （６）会場

・県の地形により2ヶ所で開催しなければ県内の盲ろう者への通訳・介助者を養成できない。

・無料で借りられる会場の確保が年々困難になっている。今年度はなかなか予約が取れず、4会場を使うことになり、その上複数の部屋も取れないなど講座によっては非常に不便を感じた。

・会場の確保

## （７）カリキュラム時間・内容

・もっと「盲ろう」の事を話していただきたいが、話を始めると、どんどん別の方向へいってしまう。

・時間数が足りない中で、どれだけ質の高い養成をしていけるか。

・県内の盲ろう者は触手話、弱視手話の方が多く、受講生のコミュニケーション(手話)技術が未熟なため充分な実習が行えなかった。

・受講生の人数が多かったため音声通訳の実習中、声がかさなり、円滑に進行できなかった。音声通訳の実習の回は、複数の部屋を確保する等の対応が必要と感じた。

・当県では盲ろう者のコミュニケーション方法が多岐にわたるため、その一つ一つを取り上げると時間が足りない。

・最終日に通訳・介助実習として、受講生に実際に盲ろう当事者の通訳・介助をしていただくが、ガイド方法も通訳もさらに講習が必要だと感じる。

・受講生に対する要求レベルをどこまで高めたら良いのか。

・受講生の中に、技術習得や移動介助が難しいと感じる方が多く、実際の派遣に繋がるようなモチベーションの維持や、楽しさ、やりがいを見い出せるようなカリキュラムを考えていきたい。

・42時間では時間が足りない。

・「移動介助実習1」は事務局が担当し、移動介助の基礎を学ぶ内容になっている。しかし、「移動介助実習1」を欠席した受講生は、移動介助の基本を学ばないまま、盲ろう講師と練習をする「移動介助実習2」や「通訳介助実習」を受講することになり、盲ろう講師の負担が大きくなると感じた。来年度以降は「移動介助実習1」を必須項目にするなどの検討をしたい。

・他県の登録の状況やその後の活動につなげる方法を知ることができると、ありがたく参考にしたいと思う。

## （８）開催地域・日程

・現在、平日の日中に実施しているが、夜間もしくは土曜日、日曜日に開講して欲しいという声もある。盲ろう者からも同年代の支援者も必要だといわれる。実際に活動するのは休日より平日のほうが多く、仕事をもたれている方の平日活動は困難と思われ、思考中である。

・平日の派遣に対応できる通訳・介助員を募集したいが、平日の養成講座の開催は、講師の確保ができないため難しい。

・当県は東西に長い県であり、通訳・介助員の偏在が気になる(東部に多く、西部は少ない)。西部地区での開催の必要性は感じているが、交通費、時間がかかるため、なかなか開催が難しい。

・平日の派遣依頼が多いため平日の水曜日に開催しているが、受講生が集まりにくい。土日開催だと受講生は多く集まるが、修了して通訳依頼をすると、平日は仕事と依頼を断られる。

## （９）講師・補助講師

・講師、スタッフの確保、講師の育成。

・地元の盲ろう者に協力を依頼しているが、指導経験が少ないこともあり、各コミュニケーションの体験相手になるだけで終わってしまいがちである。「盲ろう者のニーズ」など、盲ろう者にしか話せない部分は確実に盲ろう者へ講師をお願いしているが、「コミュニケーション方法」や「盲ろう概論」なども、地元盲ろう者が講師となり指導できる方法について考えていきたい。

・講師をできる人が少ない。84時間を1回3時間×28回で実施しているが28週間同じ人が担当になるのは負担感がある。

・盲ろうの方に講師をお願いするが、養成研修の意図の説明が難しく、毎回交流会や実技のモデル役になってしまう。

・指点字等のコミュニケーション方法を伝えることができる講師が不足している。

・講師の人材不足。

・受講生の数が多いので、特にコミュニケーション実習の盲ろう者の講師を増やす必要がある。しかし、予算の都合で少ない盲ろう講師で対応してもらっているため、各講師への負担が大きい。

・新しい講師、補助講師の育成。

・講師になる盲ろう者がいない。

・講師不足。

・人員不足により、講師、補助講師の人材確保、育成が進まない。現状としては、友の会の協力があり、講師等の確保ができている。

・盲ろう講師と補助講師の打ち合わせが十分に確保できておらず、講義の内容が把握できないことがあった。

・指導側の力量不足。

・当県では、盲ろう講師が3名（22～70歳代）しかおらず、年々講師の負担が大きくなっている。

・盲ろう講師を支援する人材の不足。講座には毎回盲ろう当事者が参加し、自分たちの力でよい通訳・介助員を育てたいという意欲が見られ、受講生にとってはそのことが大きな励みとなっている。盲ろう講師が主体的に講座を進め、受講生に対して適切なアドバイスを行うことができるよう、講座の事前学習が必要であり、そのための支援ができる人材が必要である。盲ろう講師6名のうち1名は、全国盲ろう者協会主催の指導者養成研修会を受講しているが、他5名に対してもテキストや参考資料を読んだり、DVDを見るなど、学習の場を作りたい。

・講師、後継者の育成。

## （１０）テキスト

・移動介助をチェックするためのチェックリストがほしい。移動介助の演習の際に、自己評価をしたり、第三者評価で活用したい。

## （１１）掘り起こし

・県内に190人の盲ろう者がいることが県の実態把握で分かっているが、その実態がほとんどわかっていない。そのため、講座実施会場のある市に対し盲ろう者の住所を尋ねるが、個人情報の課題があり教えてもらえない。そこで、講座開催にあたり地元報道機関を通じて盲ろう者、その家族等に講座見学や日頃の生活向上の相談の問い合わせを掲載していただいた。

## （１２）その他

・視覚障害者疑似体験セットや模擬体験セット等を毎回、全国盲ろう者協会から借用する形になる。どのようにして体験セットを備品として購入していくか、委託元である県との交渉方法があれば指導して頂きたい。

・手話を習っている方が多く盲ろうへ流れてくるが、盲ろうに対する支援との違いを理解するのに苦労している。

・受講生の手話技能不足。(盲ろう者とのコミュニケーションが取れない受講者がいる)

・開催地域によって、後援依頼後の対応が異なっている。（A市：全日程の会場確保、無料での会場や物品貸出、広報等での開催呼びかけ）（B市：協力は得られなかった）

・去年の担当は通訳できる健常の職員だったが、今年のから私が担当することになった。私は難聴のため通訳手配調整が必要になった。

# **第３章　盲ろう者向け通訳・介助員現任研修事業**

## １．現任研修事業の運営で困っていること、感じていること

## （１）受講者

・参加者の顔ぶれが固定してしまう。

・参加率が低い。

・参加される方がいつも同じになってきている。

・受講者が少ない。テーマによる。

・参加者が集まらない。

・現任研修を受けない通訳・介助員がいる。

・長期休んでいる登録者にも毎回通知を出しているが、返答もない方が多い。

・現任研修会の固定化、参加意識の低い通訳・介助者に対してどのように促すのかが課題。

・手話や要約など他の団体との予定が重なり、参加が少ない。

・受講していただきたい方が欠席し、毎回同じ顔ぶれである。

・登録通訳・介助員の技術の差(特に手話)があるので、募集の際ある程度の条件をもうけた方がいいのか思案している。

・現任研修会の開催に伴う出席は業務ととらえている。登録者側には、出席回数をクリアすれば良いという意識になりがち。温度差を少なくしていきたい。

・研修の義務化を考えているが、実現はできてはいない。実際登録110名いる中で出席率は20％未満。

## （２）運営体制

・今年度から事業を担当するが、盲ろう関係の知り合い等が少なく、どこにどういう依頼をすればよいのか、受けてもらえるのかわからないので、友の会と相談しながら進めている。

・本県の盲ろう者向け通訳・介助員養成事業と盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業の受託先が別になっているため、登録通訳・介助員に対する研修は派遣事業受託団体が行っている。そのため、当団体では養成事業修了者を対象にスキルアップ研修の内容で現任研修を行い、通訳・介助員の登録を行うよう促しているが、なかなか登録者が増えない。上記課題について実施主体の県、当団体、派遣事業受託団体が意見交換を行い、改善に向けて取り組んでいる。

## （３）予算・費用

・予算が少ない。(県、市が現任研修の必要性を理解してくれない)

・現在、現任研修会の予算は養成講習会の予算に含まれており少ないため、現任研修会独自の予算を確保していただけるよう自治体に要望している。

## （４）講師

・外部講師を依頼したいが予算的になかなか難しい。

・盲ろう者を講師として依頼したいが予算等の問題もある。

・県外からの講師を依頼したいが予算が足りない。

・県内講師では研修しにくく、外部に依頼しているが、経費が友の会の負担になってしまう。

・盲ろう者の講師がおらず、補助員として研修会に関わってもらっている。将来的には講師としての指導ができるようなカリキュラムを考えたい。

## （５）会場・開催時期

・県内北から南へ長く、受講者が1箇所に集まるのが難しい。

・手話通訳、要約筆記の現任研修会も同日に開催するので、複数登録して活動している人はすべての研修会に参加できない。

## （６）内容

・研修内容、カリキュラムをどうするか毎回悩む。

・研修内容について、受講生のニーズに沿った内容を実施することが難しい。

・他県ではどのように取り組んでいるのか知りたい。1年に1回だが、できるだけ有意義な時間としていきたいと思っている。

・地域ごと異なる研修内容があると思うが、固執することなく、柔軟に取り入れながら通訳・介助員が依頼者個々に合った対応と判断力の向上を目標とした内容の組み立てが必要と思われる。全国各地の情報がほしい。

・手話、筆記、指点字以外の通訳可能な技量が音声のみでは心もとない。いずれかの技術が身につくと派遣範囲も広がると思う。

・ここ数年、外部講師を招いて事例検討などをしながら倫理について考えるきっかけとしているが、ほとんど通訳・介助に関わらない人も多く参加するため、どうしても温度差ができてしまいピントが合いにくい。

・会員の意識がうすく、これを通して自分の通訳・介助を見直すとか、他の人の意見を聞くという事がなかなかできず、どこにポイントをしぼりテーマを決めればよいか悩む。

・見に付くような内容、技術研修、有意義な事例検討がある研修を開催したいのだが、担当者自身が研修に対するイメージ(又は組み立て)がうまくできていない。

・受講者の人数が多いため、実習や演習のような形式のカリキュラム(通訳・介助実習、事例検討、ロールプレイングなど)が組みにくい。回数を増やし、少しの人数での研修を可能にすることも考えられるが、予算の関係で難しい。

・登録者のレベルが把握できておらず、足りないところ、補わなければいけないところがわからない。

## （７）時間数・回数

・時間数が足りない。

・回数を増やしたいが、養成研修に総力を挙げている状態であり、現任研修を充実させる人的資源が私ども友の会にない。

## （８）その他

・実技研修も取り入れたいのだが、市内の盲ろう者に研修協力依頼をすると、その際に通訳・介助をする人は受講者側にはなれない。

# **第４章　盲ろう者関連事業**

## １．関連事業を実施している団体から寄せられた意見等

## （１）生活訓練

・生活訓練に参加する盲ろう者の人数が増え、部屋が狭くなりつつある。

・生活訓練事業として、新たなコミュニケーションを取得したいとの希望があり対応することができた。継続的な支援が必要となるため講師の確保や支援体制が必要となってくる。

・生活訓練事業を行っているが、盲ろう者に合った内容になっているか不安がある。

・訓練は継続して行うことが重要だが、予算がつかないため自主事業として助成金を探し実施している。

・予算には限りがあるため、希望に合った回数、時間の訓練が十分にできていない。

・引きこもりの盲ろう者も生活訓練等に参加できるよう「掘り起こし」に力を注ぎたい。

## （２）相談事業

・継続して相談事業を行っている。コーディネーター業務の中で、通訳・介助員の報告により、登録盲ろう者の日常生活の中での状況がわかり、相談→関係機関を紹介→状況改善などといったケースがある。コーディネーターが相談事務を担うこと、または相談員と密接であることは、盲ろう者の生活がよりよくなるために重要と感じる。

・県内に点在している盲ろう者の自宅を訪ねていき、盲ろう者同士で思いを語り合う、伺うという形で進めている。

## （３）情報機器

・災害時にICT技術が盲ろう者の大きな助けとなるので、今後も継続して事業を進めたい。

・盲ろう者が自立して情報入手ができたり、コミュニケーションができることを目的とした学習会及び支援として、ＩＴ講座、機械設定等の活動学習支援を行っている。

## （４）その他

・盲ろう者からの要望が強い内容は、自由に集まれる場所、災害時の対応、相談事業。

・特定非営利活動法人となっての自主事業として勉強会・エコ作品作りを行っている。イオン幸せの黄色いレシートキャンペーンに登録し、盲ろう者・地域住民への啓発を行うと共に、団体で酔いした設置箱に入れてもらったレシートの売り上げの1％がプリペイドカードで還元される。1年間で約10万円にはなる。還元された金額の中で、事務所で使用する文房具・コピー用紙・皆さんから頂いた不要品でエコ作品を作り、不足のものを購入している。

・地元のイベント等に参加し、手作りの作品のバザーを行っている。昨年度は売上が約7万円となった。バザーに参加することで地域住民との交流もできる。

## ２．関連事業を実施していない団体から寄せられた意見等

## （１）実施が困難な理由

・盲ろう者の高齢化に伴い、病院に行く人が増えてきた。通訳・介助者も同じで送迎は不可、退会も考え始めている声も聞こえている状況の中で、若い人たちの参加が固定されず、新事業を考えていく事は不可能に近いのが現状である。

・都道府県で実施されるように要望を継続しているが、なかなか予算がつかない状況。

・下記の事業を実施したいが、運営面（人員）及び予算の都合で実施できない。生活訓練…（1）白杖使用による歩行訓練（通訳・介助員と同行の場合も含む）、（2）コミュニケーション訓練（パソコン、手話、触手話、点字学習）、（3）情報学習（各県の友の会だより、全国盲ろう者協会のコミュニカ、協会だよりを読む）、（4）健康づくり（散歩、体操、生活習慣病の予防の学習会）

・派遣事業の利用の仕方についての説明を盲ろう者個人、又は家族の方にしたいが人材不足でできない。

・派遣利用に繋がるまでの活動を事業にしたいが具体的な方法がわからない。

・平成28年4月1日の中核市移行に伴い、本県で実施していた「盲ろう者向け通訳・介助員派遣事業」及び「盲ろう者通訳・介助員養成研修事業」を移譲されたものであり、本市においての事業実績も平成28年度、29年度(見込)と少なく、他の事業の実施については現存の事業実績を上げていく中での検討課題となっている。

・ピアカウンセリング(盲ろう者対象)・交流事業、盲ろう者対象交流事業・生活訓練事業、盲ろう者向け生活訓練事業3つの新規事業を企画している。が、施設が開所したばかりで手探りの状態である。